

石垣島におけるパイナップルの促成露地夏実の果実特性

出花幸之介・添盛 浩・島仲常吉・島袋用詳・比嘉正和 (沖縄県農業試験場)

Konosuke DEGI, Hiroshi SOEMORI, Tunekichi SHIMANAKA,
Yosho SHIMABUKURO and Masakazu HIGA :

Fruit Property of Forced Summer Crop of Pineapple in Ishigaki Island

パイナップルは、石垣島の自然条件下では、その大半が12月中下旬に花芽分化し7月中旬から8月下旬に夏実として収穫される。しかし、エチレンやオーキシシン類を用いて花芽誘導することにより比較的簡単に収穫時期を促進できる。本報では、露地栽培による生食用果実の促進可能期間について、花芽誘導時期や株の大きさなどの点から検討した。

1. 材料および方法

1982年9月に植付けたハワイ導入系統を用いて、1983年9月から12月にかけてアセチレン混合液処理による花芽誘導を行った。毎月中旬、3日おきに3回、アセチレン混合液をパイナップルの芯部へ50mlずつ灌注した。1区120~150株である。1984年4月から8月にかけて、果実が基部から1/4黄変着色したときに収穫し調査した。

2. 結果および考察

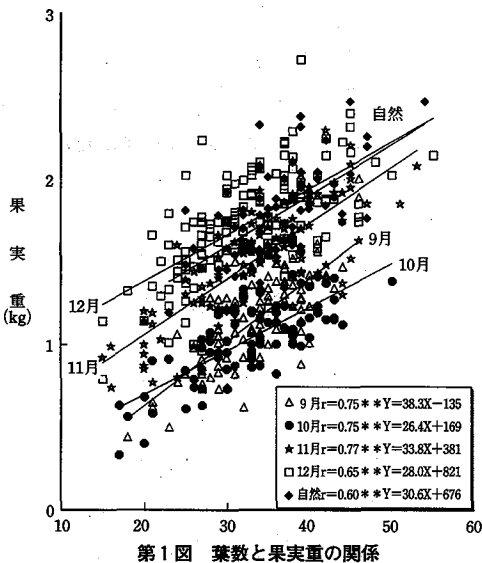
花芽誘導が9月14~20日の場合収穫日は5月1日、10月15~21日では6月7日、11月14~20日では7月11日、12月14~20日では8月2日、自然条件では8月5日であった。自然夏実に較べた促進日数は12月処理で3日、11月処理で25日、10月処理で59日であった。

葉数が多いほど小果数が多い傾向があったが、9月処理は最も小果数が少なく、10月と11月がそれに続き、12月処理と自然夏実は小果数が多かった。小果重

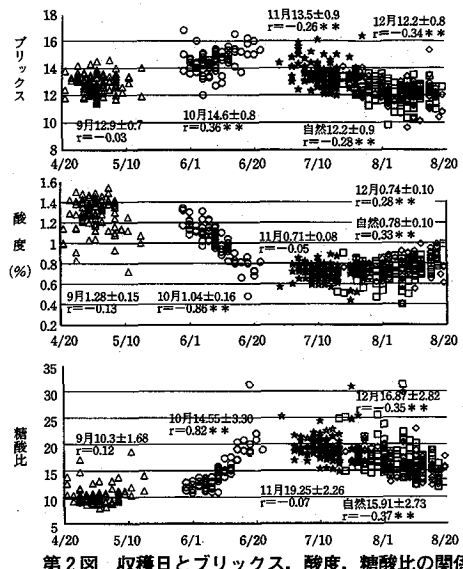
(果実重/小果数)は10月処理が最も小さく、次は9月処理で、11月処理はそれに続き、12月処理と自然夏実は小果重も大きかった。葉数が多いほど果実重が大きくなる傾向があったが、9月と10月処理の果実重は最も小さく、11月処理がそれに続き、12月処理と自然夏実は最も果実が大きかった。9~10月処理でも葉数が32枚以上あれば果実重は1kgを超えた(第1図)。

12月処理で葉数とブリックスの間に $r=0.41^{**}$ の相関がある以外は、葉数と酸度や糖酸比などの間の相関は小さかった。果実品質は収穫日との関係が強かった(第2図)。ブリックスは6月20日前後に収穫した果実で最も高くなり、11月処理から自然夏実までは収穫ははじめ頃のブリックスが高く後半下がる傾向があった。酸度は6月1日から6月20日にかけて急激に下がり、7月20日頃までは0.7%位に安定し、それ以降は緩やかに上昇した。これらの結果として、糖酸比は6月1日から20日にかけて急激に上昇し、7月20日頃まで 19 ± 2 で平衡状態にあり、その後緩やかに下降した。

以上のことから、石垣島地域では6月中旬以降に成熟すれば、生食用として十分な品質の果実が得られることがわかった。そのためには前年の10月下旬頃から花芽誘導を行う必要があるが、10月~11月の花芽誘導処理では果実が小さくなるので、収穫時の葉数が32枚(花芽誘導時は43枚)以上になる株を対象とした方がよい。



第1図 葉数と果実重の関係



第2図 収穫日とブリックス、酸度、糖酸比の関係